

## いよいよそすい疎水を

いなみ野の人々は、おもにかんで神出のめっこう雌岡山さんから流れてくる水で作物を育ててきました。けれども、その水も十分ではなく、そのうえ、台地を流れる川の水は、冬の間でさえも利用されていきました。

それに比べて、くら雌岡山の東、台地の向こうにある山田川やまだがわは、ゆた豊かな水を集めて流れていました。

人々はいつも東の山々をながめて、「あの山のふもとの辺りだったら、たくさんさんの水があるやろなあ。」



と、どうにもならない夢ゆめを見ては、ため息をつくばかりでした。

税金ぜいきんの苦しみの中、何とかして米づくりをしたいという人々の思いは、「どうしても水がほしい」という熱い願いとなり、やがて、※疏水そすいの計画になっていきました。

そして、いよいよ野の寺村でらの魚住完治うおずみかんじさんたちが、水をもとめて行動を開始しました。魚住さんは、

「百年以上も前から何度も、山田川やまだがわから水が引けるかを測量そくりようした者はおるが、ここまで水を引いてきた者はおらん。誰だれかがしてくれるやろうと思っていたが、それでは水は来こん。やっぱり人を当てにして待ってたらあかんのや！」

「わしらが生きるためには、おてんとさんまか任せではどうにもならん。何としても自分たちで水を引いて米を作らな、くらしもようならん！」と、人々に呼びかけました。

※疏水：川や湖から水を送るためにつくった水路

しかし、山田川やまだがわから水を引く計画は思った以上に工事がむずかしく、費用もかかり、小さい村だけではとても完成しそうにもありませんでした。そこで、「みんなが心をひとつにして県の力を借りるしかない！」という考えに行きつきました。

ついに、明治十一年（一八七八）、県令※けんれいにお願いの文書を出しました。しかし、県は税金ぜいきんをおさめなければ、疏水そすいの工事はみとめないというきびしい態度たいどでした。

## 命の土地を

その次の年に、幸いにも疏水そすいのことに理解りかいのある北條直正ほうじょうなおまささんが加古郡かこぐんの郡長※ぐんちやうになりました。

※県令…県の長官で今の県知事にあたる  
※郡長…郡の長官で今の市町長にあたる

ほうじょうぐんちよう  
北條郡長はいなみ野の人々の苦しい生活を放っておけず、県に税金ぜいきんを見直してもらおうよう、何度もお願ねがいに行つてくれませんでした。それでも県けんの税金ぜいきん係がかりは、北條郡長ぐんちようの話はなしを聞き入れてはくれませんでした。

一方、村の人々は税金ぜいきんが払はらえずに困こまっていました。もう、土地ちを売うつて税金ぜいきんの一部いちぶでも払はらうしか方法はうほうがないところまで、追おいつめられていました。けれども、水みづのない土地ちなので買かい手あしは現あらわれません。

ちようどそのころ、国くにが新あたらしくぶどう



園をつくるために場所をさがしていました。北條郡長や丸尾さんたちの活躍で、国に印南新村の土地を買い取ってもらうことが決まりました。

しかし、国に買ってもらおう土地の値段について、村の人々を説得するのは、思った以上に大変でした。それというのも、国の言う値段があまりにも安かったからです。

村の人々は、

「郡長たちの努力はわかる。けど、わしらの畑は先祖代々苦勞して耕してきたものだ。」

「あの赤土には、何があっても負けないぞという執念がしみこんでるのや。」

それなのにこんなに安くては……。」

と、言って誰も納得しませんでした。

その年の大晦日に最後の話し合いをすることになりましたが、除夜の鐘がなっても誰一人として集まって来ませんでした。

(村の人々にとって命のような大切な土地を売ろうとしているのだ。……そ  
うだ。わしも同じような苦しみを一緒に背負わなければ……。)  
と、心に決めた北條郡長は、

みなさんにとっては、命のような土地、くらしの支えを売ろう  
としていることは、よくわかっています。この私わたしもありつけたけ  
の財産ざいさんを投げ出すことにしました。みなさんもつらいでしょう  
が、税金ぜいきんを払はらうために、そして村の将来しょうらいのためにも、どうかこ  
こらで手を打っていたいただきたい。

北條直正

という気持ちのこもった手紙を書いて、正月の朝に村の人々に届けました。

ほうじょうぐんちやう  
北條郡長の熱い思いに心を動かされた人々はついに納得なっとくしました。

そして、ようやく三十ヘクタールあまりの土地を国に売って、そのお金で税金ぜいきんを払はらうことができたので、あらためて県令けんれいに「疏水工事そすいのお願い」を申し出たのでした。

## 待ちこがれた淡河川疏水おうごがわそすい

明治十八年（一八八五）になって、国からも工事費用を借りることができるようになりました。

そして、外国の土木技術どぼくぎじゆつを学んできた国の技師ぎし、田辺義三郎たなべぎさぶろうさんたちの調査ささによって、これまで考えていた山田川やまだがわではなく、少し北の方を流れている

淡河川おうごがわから水を引く方が良いとわかりました。

けれども、新しい計画には大きな問題がありました。それは、山田川やまだがわと淡河川おうごがわが合流する御坂みさかの深い谷の所で、どのようにして水を渡すわたかということでした。

なやんだ結果、田辺さんたなべは「噴水管ふんすいかん」を使うことを思いつきました。そして、横浜よこはまの水道工事でその方法を使ったイギリス人技師ぎし、パーマーさんに相談さんせんしました。パーマーさんはその考えかんがに賛成さんせいし、さらにイギリスでつくったマイルドスチールマイルドスチールという鉄管てつかんを使うことていあんの提案ていあんもしてくれました。



※噴水管：31ページの図（御坂サイフォンのしくみ）を参照  
※マイルドスチール：うすくのばしても強い性質をもつ鉄の種類



外国の最新技術ぎじゆつを使った大工事だったので、村の人々は、おどろきと不安でいっぱいでした。

「いっぺんに降りた水が、また上に昇のぼるなんて考えられん。」

「イギリスからどうやって重い鉄管を運んでくるんや。信用できん。」

「こんな工事は無茶な話や。」  
など、口々に不安を言い始め、工事に反対する意見も出るようになりました。

野寺村のでらの代表の魚住逸治うおずみいつじさんは、

「みんな、しっかり考かんえてくれ！ 国や県けんがこれほど疏水そすいに力を入れてくれた



ことは、これまでであったか？

こんな機会はまたとない！

これを受け入れないと、あとあとまできつと後悔する！ だから、みんな大変だが、がんばろう！」

魚住さんは涙を浮かべ、必死になって呼びかけました。

人々はこれまでの苦勞を思い出しながら、

「そうだ！ 魚住さんの言うとおりで！」

「これから始まる大工事にくじけずに、強い気持ちでやりとげよう。」  
と、お互いの顔を見合いながらうなずきました。